

知識探訪

多民族社会の横顔を読む



【第24回】

泉田英雄

(豊橋技術科学大学建設工学系准教授)

クランのスライマン・モスク

マレーシア独立以前に建設されたモスク建築の中で、私が最も異色であると思っているのが、スランゴール州クランのスライマン・モスクである。現地の木造建築の系統のものを除くと、オランダ支配時代にジャワから伝えられた木造モスクが最も古い。マラッカのカンポン・フル・モスクなどがそれにあたり、ピラミッド型のモスクに多層のミナレット(塔)が付属する。

次いで、英国統治の19世紀時代にはまったく別な様式が登場する。ペナンのクリン・モスクやアロースターのザヒール・モスクなどに見られるように、屋根の上にキューポラ(ドーム)が乗り、壁にアーチ開口部が穿かれ、インド・イスラム風の組積造である。英国東インド会社を通してインドとの交流が緊密化したためであるが、それを後押ししたのはインド



東インドの文明でインドのムガル帝国だけが「本格的(Substantial)」建築を持っているという英国人の考えだった。

19世紀半ば、東洋の美術・建築史を最初に

体系付けたジェームス・ファーガソンは、東洋諸国の文明をこの「本格的」の程度で識別し、時間が経てば朽ちる木造建築の伝統を持つ文明は低級であり、それらの中でインドのムガル帝国を例外とした。そして、英国支配下のインドやマラヤにとどまらず、マラッカ海峡対岸のスマトラ側のアチューヤデリ(現メダン)でもインド・イスラム風のモスクがどんどん建設された。中には、ジョホールのスルタン・アブ・バカル・モスクのように西洋古典様式を採用したも

のがあり、これはスルタンが単純に西洋文明に心酔していたからだと理解される。

クランのスライマン・モスク



は、1920年代末に建設計画が進められ、1932年に竣工した。外壁を鉄筋コンクリートの打放し、細部は白色セメントの左官仕上げとし、四角と円形による幾何学形態が心地よい。対照的に内部は賑やかで、英国チューダー朝(1485~1603)の建築様式チューダー・ゴシックを思わせるマリオン(方立て)のついた開口部とステンドグラス、そして円形ドームを八角形平面にのせ、見事に一つの建築にまとめ上げている。最も不思議なのは玄関ホール天井のモールディング(くりがた装飾)である。アールデコの幾何学模様に対して、独立柱上には日本の寺院の雲形肘木のような、あるいは飛天の翼のようなものがついている。

発注者が美術・建築に非常に通じている場合を除いて、このようなデザインは建築家の発想であり、発注者のスランゴール・スルタンにも英国の駐在官からも具体的な指示はなかったと思われる。設計者は、定礎石から英国王立家建築協会正会員のL・ケステベン(Kesteven)であることは判明しているが、英国ではまったく知られていない建築家である。才気あふれる建築家による傑作である。

【プロフィール】

1954年生まれ。筑波大学大学院修了。太平工業勤務、青年海外協力隊参加を経て、筑波大学助手。1997年から豊橋技術科学大学准教授。専門は近代建築史、特に18世紀から20世紀にかけてのアジア建築を研究している。著作に「植民と移民による都市形成・チャイナタウンと南洋華人街」(学芸出版社、2007年)など。